

日本災害看護学会先遣隊 令和6年能登半島地震活動報告

2024年1月7日(日)

活動隊員：酒井彰久、斎藤正子、藤田さやか、酒井明子

1. 活動日時

令和6年1月7日(日) 8:00~19:00

2. 活動場所

珠洲市健康増進センター、蛸島小学校、旧蛸島保育所、正院小学校

3. 被害状況(消防庁情報 5日7時30分現在)

人的被害：石川県死者128名、倒壊による生き埋めなど安否確認中

住家被害：建物全壊292棟、半壊54棟、床上浸水7棟、床下浸水5棟、火災発生18件

道路被害：穴水町、能登町、輪島市、珠洲市における国道・県道の多数にひび割れ、地割れ、隆起があり片側交互通行となっている。7日午前中より被災地は降雪があり、大規模な大雪による通行止めの可能性が石川県より通知があり。

4. 天候

雨・みぞれ・雪 最高気温5℃ 最低気温0℃

5. 活動の実際

8:00 珠洲市健康増進センター・保健医療福祉調整本部

1.昨日90代女性が救出された。クラッシュ症候群の危険性があり、補液3000mlを投与しカリウム5.0以上であったためGI療法を実施し、命を繋ぐことができた。本日より発災後7日目であり雪の予報のため厳しい状況であるが生存者の救助を継続していく。

2.技術支援チームが本日より活動開始となった。雪道の運転の際、コメンタリードライブ方法について説明がなされた。

3.DMATは14隊、モバイルファーマシーが本日より開始予定、災害処方箋(2週間程度の処方)について説明があった。また富山県よりDHEATの先遣隊が入る予定である。

4.本日避難所66箇所が開設されている。感染症や認知症をもつ被災者への支援など、福祉的な介入も必要である。各避難所のニーズ把握をお願いしたい。

5.避難所における看護職24時間常駐支援体制

各避難所の高齢化率が高い。トイレ誘導、おむつ交換、排泄介助、徘徊見守り、夜間外傷対応もあり看護職による24時間支援体制の重要性が高まっている。本部から日本看護協会に現状を報告し、24時間体制の支援依頼を行った。

6.在宅支援体制構築

在宅の要配慮者に対する訪問体制について、珠洲市保健師および富山県DHEATと打ち合わせを行った。令和5年能登半島地震後の継続訪問調査用紙について説明し、今後の在宅支援に繋げ、更に今後の地域の支え合いセンターに繋げていくことを念頭において活動することを地元支援者と確認した。

7.派遣について珠洲市から県対策本部に依頼し、支援に繋げ医療保健福祉の連携体制がとれるように調整した。

9:00 蛸島小学校・蛸島保育園・上戸保育園を巡回

蛸島小学校：感染予防のために、体育館及び小学校内の教室の換気を行なった。被災者の住民

の中で自発的に体育館内や廊下等をモップにて清掃を実施していた。支援内容としては 1.寝たきりの被災者の就寝環境の調整として段ボールベットを使用している被災者に対して、エアマットを敷いて褥瘡予防に努めた。2.小学校 1-3F にいる被災者及び体育館内の被災者それぞれの既往歴及び内服薬の残数、要介護認定の有無について、手分けをしながら確認を行なった。人数が多く、全員の確認はできていないため明日以降も継続とする。3.避難者のオムツ交換や褥瘡の有無、トイレ回数の頻度を基本に、被災者の介護状況を鑑みた配置の再検討、4.被災者の擦過傷に対する応急処置、5.口腔ケアの促し、6.支援物資の配給の手伝い。

避難者に 4 歳、9 ヶ月、2 ヶ月の乳幼児がおり、保護者から離乳食・ミルクと衣類のニーズがあった。4 歳児は巡回時に大泣きをしており、母親にも疲労が見られたため話を聞いたところ、児はトイレも怖くてオムツをつけて失禁している状態とのこと。特に衣類はサイズが揃っていないため、他の避難所や持ち込みの支援物資の中から選別し、子ども用のおやつ・玩具と合わせて個別に提供した。児は物資提供に対し笑顔が見られ、それを見た母親も喜ぶ様子があった。また、別の児の親族も個別の物資提供については、サイズの合う服が入手できなかったため嬉しい、という反応であった。高齢化率の高い地域でもあり、子どもの避難者の割合が少ない現状がある。

蛸島保育園：2 日前に巡回以来、環境面では仮設トイレ・給水設備と携帯電話の充電スペースの設置がされていた。また、居室内は土足禁止となり、物資も整理整頓されていた。子どもの遊ぶスペースは室内の生活スペースと共通であるが、高校生（避難所運営ボランティアの家族）が外遊びやカード・ボードゲームなどの遊びを提供し、ストレスが発散できているようであった。避難所運営の医療看護班のリーダーとメンバーの 1 人は准看護師と看護師の資格をもっており、避難者の健康状態を観察したいが、どのようなことに注意すれば良いかという相談があった。エコノミークラス症候群と生活不活発病の予防の重要性について説明し、タオル体操やストレッチなど具体的な指導案について情報提供した。また、血圧測定などセルフ健康管理を進めることについても相談があり、医療物資の依頼をした。避難所運営スタッフからは、昨日自宅から避難してきた高齢者夫婦が気になるという情報共有があり、巡回した。被災地に入ることが困難な状況が続いているため、過去の災害と比較しても、同時期の子どもに対する支援が内部・外部共に未充足と判断できる。

#### 上戸保育園：

昨日に発熱者が 1 名おり受診しているが、検査はせず解熱剤の内服で解熱している。本日はその家族も同様に 37.5 度以上の発熱を認めた。避難所運営スタッフに有症状者の隔離の必要性について助言するとともに、保健医療福祉調整本部に報告した。もともと廃園になった園施設を活用しているため、前述の保育園と異なり施設設備が整っていない印象がある。行政職員 1 名と地域のボランティアで避難所運営を行なっているが、生活スケジュールは確立され、トイレなど衛生環境は整っていた。その他、巡回時に 30 代の男性から不安の訴えがあり、避難生活によるストレスで不眠が続いているとのことであった。要配慮者対象の避難所開設のニュースを見て、自分もそこに移送してほしいということを何度も訴え、DPAT に繋ぐ目的で保健医療福祉調整本部に報告した。

## 在宅訪問

令和5年能登半島地震後の継続訪問用紙をもとに在宅の巡回を行った。在宅には、水やおむつ食料などの物資の配給はなされていないため、物資の搬送も行った。

## 自衛隊による入浴サービスの確認

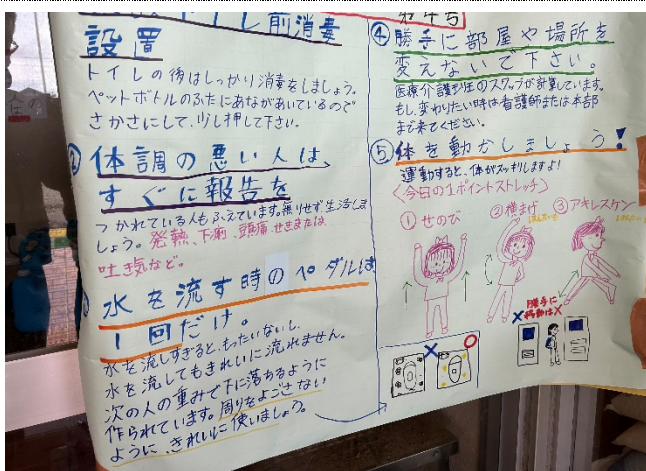
現在、上戸小学校1か所で自衛隊による入浴支援が行われているが、浄化などの問題もあり、水が濁っている状態である。宝立および正院で入浴支援可能か調査中であるが、規模の大きな自衛隊支援を1-2日待たねばならない。ストーマの方々など、清潔保持に困っている方の声を増えてきているため、今後の入浴支援体制について相談した。

## 6. 考察

支援物資は徐々に各避難所への供給もできているが、必要としている被災者に行き届いていない現状もある。子どものいる家庭においては子ども用の支援物資が届いていることが認知されていないケースも多く、個別のニーズを把握していくとともに子ども用の物資の提供についてもアナウンスを行っていく必要がある。また、地震発生時の影響から精神的に不安定な様子も散見され、継続的な観察と家族を含めた支援が必要である。心理的な面でのフォローについては、成人の被災者においても同様のことが言える。既往に精神疾患を有している方においては、疾患に関連した症状の悪化・顕在化も懸念され、DPATなど専門チームへの情報提供や連携も密に図りながら支援活動を行っていく必要があると思われる。

各避難所においては感染症の疑いのある被災者もさらに増えており、依然として対応が必要な状況である。本日の巡回においても土足で生活している避難所や断水が続く避難所も多かった。同時に生活用水が確保されているものの、ハンドソープやタオルの供給がほとんどなされていないといった所も見受けられた。また、ある避難所の統括からは、天気がいいので高齢者に外に出て空気を吸わないか促したが、「私たちが外に出ると頑張っている若者に申し訳ない。」と外出を控えているとのことであった。日中に避難所に残っている高齢者に運動を呼び掛ける際には、このような背景もあることを考慮していく必要がある。

## 7. 参考写真



子どもたちが作成した避難所新聞



給水設備の設置